

2. イブニングシアターの活動

イブニングシアターは、定例上映会として定着し2001年以降9年間で54回開催、その他特別上映会を5回、全国大会映画会を3回実施している。会場は土木学会講堂のほか、大学の階段教室、市民ホールなどを活用して、会員をはじめ、一般市民の方々にも広く公開している。参加者数の推移は図-2のグラフに見られるように、学会講堂では50人～100人、市民ホールなどでは200人～300人を集めている。

毎回アンケート調査を行い、その結果を資料集『土木学会イブニングシアターデータブック』vol.1, vol.2としてとりまとめ、委員会活動成果として報告している。回毎の回答数及び回答率を図-3に示すが、回答率は平均58%と高く、熱心な参加者に支えられていることがわかる。また、特筆すべきは参加者メーリングリスト「イブニングシアターの集い(仮)」である。これは参加者のメールアドレスを登録しているもので現在1,500名が登録されている。イブニングシアターの開催案内をタイムリーに送付すると共に、事前申込の登録フォームをweb上に用意・誘導して、参加者数の事前把握に活用している。また、アンケートも同様にwebからの登録フォームを用意・誘導して、自動集計の仕組みを作成している。上映会が終わると同時に、アンケート依頼のメールが流れ、生の声がアンケート結果として返ってきて、大変貴重な資料となっている。

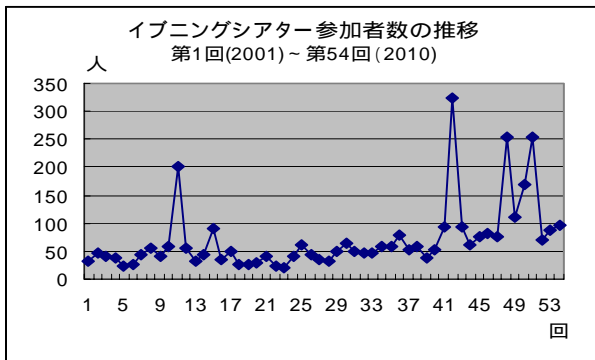


図-2 イブニングシアター参加者数の推移

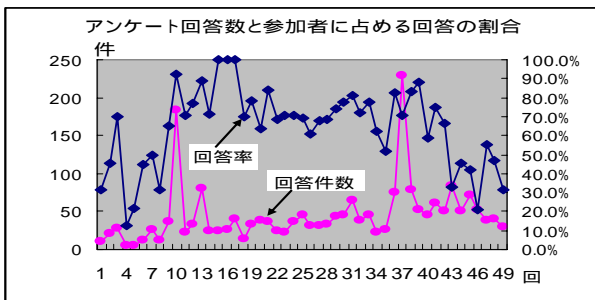


図-3 アンケート回答者数と回答率

3. 過去の主な災害と災害記録映像

表-1 選定記録映像と災害名²⁾

選定記録映像	制作年	上映時間	関係災害名	災害年月
伊勢湾台風から30年	1989.6	28分	伊勢湾台風	1959.9
ふるさと木曾三川 伊勢湾台風から35年	1994.9	24分	伊勢湾台風	1959.9
津波との闘い	不明	46分	チリ地震津波	1960.5
臨海副都心を支える下水道 台場地区汚水管・雨水管工事記録 液状化対策を中心に	1995.5	22分	新潟地震 (M 7.5) 釧路沖地震 (M7.8)	1964.6 1993.1
「自然・砂防・文化」 -揖斐川上流域の砂防-	1995. 12	23分	台風25号・前線	1965.9
わすれてはならない教訓 最上川流域水害	1997.9	16分	羽越豪雨 羽越水害 水害 (台風7号・前線) 風水害(台風5号)	1967.8 1969.8
昭和49年多摩川 狛江市猪方地先災害復旧記録	2005.3	32分	多摩川水害	1974.9
千種川台風17号災害復旧事業	不明	31分	台風17号	1976.9
小貝川災害復旧記録	不明	36分	小貝川堤防決壊	1981.8 1986.8
地域の安全を守る -水無川砂防ダム記録-	1998	23分	雲仙岳噴火	1991.6
武蔵野線新小平駅隆起災害復旧工事記録	1992.9	25分	平成3年10月降雨と台風	1991.1
一般国道4号 蔵王大橋 災害復旧180日	1995. 11	20分	台風26号	1994.9
阪神・淡路震災復興 VIDEO NEWS 1995 10月号	1998	23分	阪神・淡路大震災 (M7.3)	1995.1
阪神淡路大震災による 道路の被災と復旧	1995.7	20分	阪神・淡路大震災 (M7.3)	1995.1
JR六甲駅復旧工事の記録	1995.6	14分	阪神・淡路大震災 (M7.3)	1995.1
よみがえれ神戸港 vol.	1996.3	21分	阪神・淡路大震災 (M7.3)	1995.1
復興への礎	1996.3	21分	阪神・淡路大震災 (M7.3)	1995.1
阪神大震災第10工区下部工事の記録	1996.4	17分	阪神・淡路大震災 (M7.3)	1995.1
鳥居川 環境保全工の記録 水生生物の多様性を目指して	2000.3	20分	梅雨前線豪雨	1995.7
豪雨災害のつめあと	1999.3	32分	那須水害(栃木)	1998.8
福井豪雨アーカイブズ	2008.3	37分	新潟,福島,福井豪雨	2004.7

映像委員会では、官公庁、企業、各種団体などで数多く制作されている土木技術に関する映像作品を、企画・表現・内容・作品など多様な視点から評価し、一定の価値を有すると認められる作品を選定する「土木技術映像選定制度」を設けている。委員会では選定審査会を設け、応募された作品について随時審査を行っている。現在、選定作品 520 本の講評付き DB のほか、アンケート調査による 2,700 件の土木技術映像 DB を構築し、維持更新している。

土木学会の選定作品から特に災害に関する映像と災害名は表-1 のとおりである。

表-1 から選定されている災害記録映像作品は阪神・淡路大震災が多いのがわかる。

4. 災害映像記録とアンケート事例

2 章でアンケート調査を実施していることを述べた。アンケートの項目は、属性（年齢、専門分野）、映像委員会への意見・希望（曜日、場所、開始時間ほか）などが主だが、感想を自由に記載してもらっている。また、選定映像作品になると年度ごとに上映されることもあり広く一般の人たちにも広報でき、上映後の率直な感想が大変貴重であると思われる。ここでは、2 作品の災害記録映像の調査結果について述べる。

4.1 阪神・淡路大震災に関する記録映像

阪神・淡路大震災は 1995.1.17 に発生したが、紹介する作品は選定映像として災害特集には必ずというほど上映されている。

(1) 作品の概要

作品：阪神大震災による道路の被災と復旧³⁾

制作：1995 年 7 月

上映時間：20 分

企画：建設省近畿地方建設局

制作：日本ソチ株式会社関西支社

内容紹介

阪神・淡路大震災により壊滅的な被害を受けた道路の生々しい被災状況を震災直後に調査・収録している。被災後の応急復旧措置から幹線道路の本格復旧に至るまでの耐震設計を見直し構造物の補強、ゴム支承を使用した落橋防止工法等の施工状況を詳細に紹介している。また、当時のニュースの音声バックに流れ、現場の雰囲気うまく引き出された作品である。

(2) アンケートの属性

本作品は、2007 年～2010 年まで 4 回上映されており延

べ 212 人の回答を得ている。年齢別構成は図-4、関係する職業を図-5 に示す。

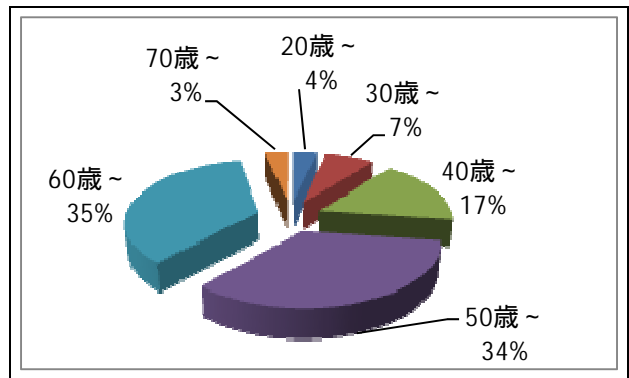


図-4 「阪神大震災による道路の被災と復旧」
上映会参加者 年齢構成

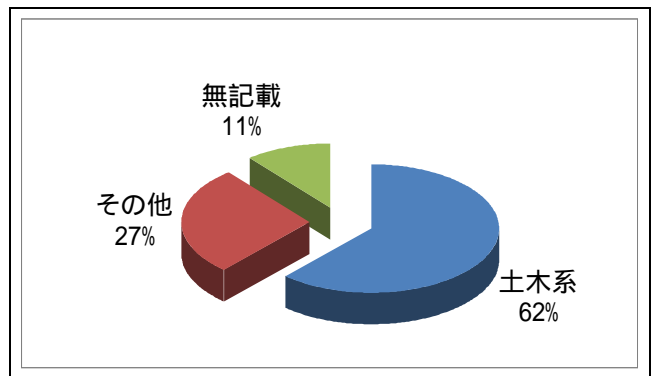


図-5 「阪神大震災による道路の被災と復旧」
上映会参加者 職種

図-4 より、上映会参加者は 50 歳以上が約 7 割で年齢層の高いことがわかる。また、図-5 より土木分野に属している参加者が 6 割程度であることがわかる。

(3) アンケートの調査結果

アンケートは、自由な感想文であるため、ひとまとめにすることは困難であるが、内容から判断して表-2 のような分類（「参考になった」などの単純な感想は除く）となった。

分類ごとの記載の割合は図-6 のとおりである。

表-2 感想文の内容から分類

・被害の甚大さの再確認
・土木技術（者）の重要性
・報道・映像
・記憶の呼び起こし（風化させない）
・復旧（被災を受けた人など）
・防災（教訓を活かせ）の重要性
・PRの必要性
・内容（専門性）

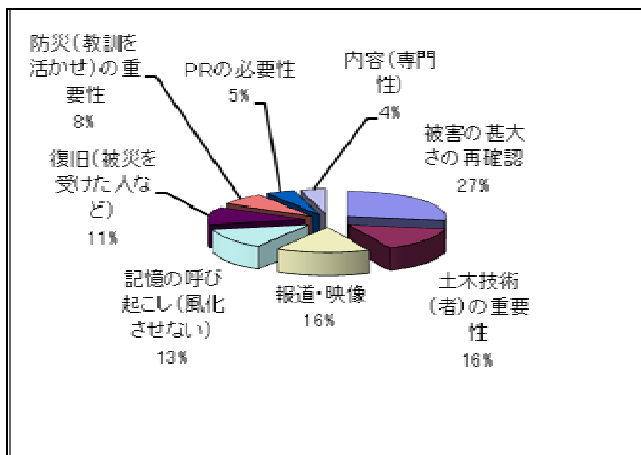


図-6 分類別記載の割合

分類ごとの主な記述内容は以下のとおりである。

[被害の甚大さの再確認]

- ・あらためて被害の多さと大きさが感じられた。
- ・地震の怖さを実感した。
- ・初めて災害の大きさを感じた。 等

[土木技術(者)の重要性]

- ・地震に対応する土木の力をつけていかなければいけない。
- ・耐震設計の重要性を再認識。
- ・土木技術について再度考えてみたい。 等

[報道・映像]

- ・上空から撮影した映像を始めて見た。
- ・直接現場を見られなかったのでとてもリアルに感じられた。
- ・当時の記録としては貴重のもだった。 等

[記憶の呼び起こし(風化させない)]

- ・H7.1.17の震災を思い出した。風化させない努力も必要。
- ・関東大震災以来の都市直下型の激震被災を風化させないこと。
- ・だんだん記憶が薄れてきたが、今日、再認識ができた。
- ・この貴重な経験を風化させてはならないためにも、震災の記念日に再放送してはどうか。 等

[復旧(被災を受けた人など)]

- ・復旧の様子も始めて知って驚きの連続であった。
- ・復旧までの人の力の大きさを感じた。
- ・道路が不通となったため、復旧が困難になったことがよくわかった。 等

[防災(教訓を活かせ)の重要性]

- ・地震防災の重要性を訴える映像である。
- ・地震による被害の教訓(未然防止、発生時の対応)を

生かし続けることが大切。 等

[P R の 必 要 性]

- ・今後も社会の人々に PR (減災知識) されることを希望する。
- ・記録映画として 1 級の作品。もっと広報を。 等

[内 容 (専 門 性)]

- ・多少専門的である。
- ・最後のシメが少し急ぎすぎた為、専門的過ぎて一般人にはわかりにくいのでは。
- ・なぜ、阪神高速道が崩れたかをプロの見解があればありがたい。 等

4.2 伊勢湾台風に関する記録映像

伊勢湾台風は 1959.9.26～27 にかけて日本列島を直撃した台風だが、室戸台風、枕崎台風とあわせて昭和の三大台風のひとつに挙げられている。1995.1.17 に阪神・淡路大震災が発生するまで、犠牲者数は、第二次世界大戦後の自然災害で最多のものであった。本作品は、20 年後に制作されたものであるが、上映は伊勢湾台風から 50 年を経ている。

(1) 作品の概要

作品名：伊勢湾台風から 30 年 いま、わたしたちは⁴⁾

制作：1989 年 8 月

上映時間：28 分

企画：建設省中部地方建設局木曾川下流工事事務所

制作：株式会社 CBC テレビ映画社

内容紹介

昭和 34 年 9 月 26 日～27 日、日本列島を直撃した伊勢湾台風は、死者・行方不明 5101 人、負傷 3 万 8,917 人、家屋倒壊 15 万 3,893 棟、床下浸水 36 万 3,611 棟、耕地被害 20 万 4,307ha、船舶沈没 2,430 隻という、災害史上に特筆される大災害をもたらした。

この被害の中心は、木曾川河口東岸を締め切って干拓して開田された干拓地帯と名古屋港湾部であった。干拓外線を取り巻く長大な防潮堤が、港内の高潮位時と台風の接近時が重なったため、海面が膨上し、押し寄せる高波と波圧をうけて決壊した防潮堤の破口から射入する怒涛によって耕地、人家がひと飲みにされてしまった。

現在、この決壊箇所は大沼となり、「野鳥生息地」としてパドウォッチングに訪れる人を楽しませている。ここを訪れた人のうち、何人が、かつての台風被害の恐ろしさを知っているだろうか。「災害は忘れたころにやってくる」の譬のとおり、今、30 年を経過して被災地の人々の記憶も風化しつつあるとき、当時の被災者の生々しい言葉と被災状況を撮った古いニュース映像によって台風災害の「すさまじさ」を記録として映像化したことは大き

な意義がある。現在の防災施設と比較することによって、かなり考えさせられる作品である。

(2) アンケートの属性

本作品は、2009.1.28 に上映され、アンケートは 47 人の回答が得られた。年齢別構成は図-7、関係する職業を図-8 に示す。

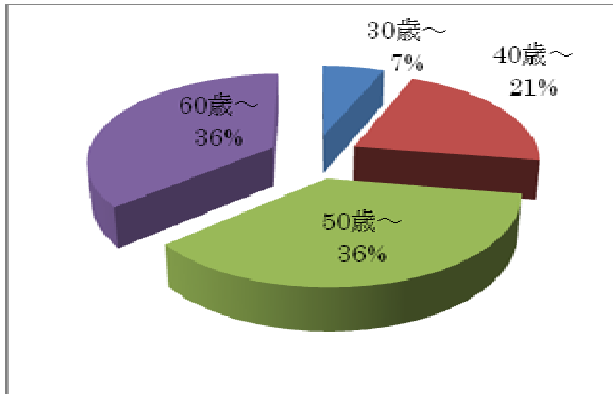


図-7 「伊勢湾台風から 30 年」
上映会参加者 年齢構成

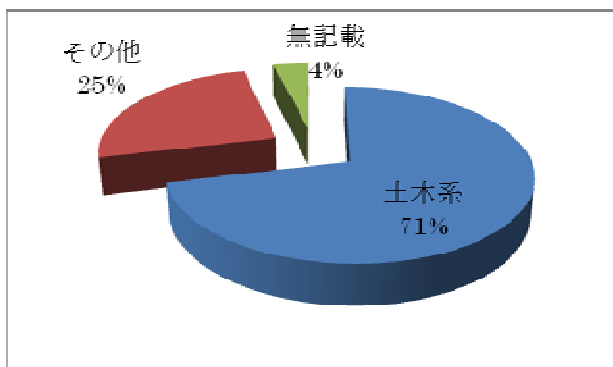


図-8 「伊勢湾台風から 30 年」
上映会参加者 職種

図-7 より、上映会参加者は 50 歳以上が 7 割以上で年齢層の高いことがわかる。また、図-8 より土木分野に関係している参加者が 7 割程度であることがわかる。

(3) アンケートの調査結果

4.1(3)で述べたとおり、アンケートは、自由な感想文である。分類については表-2 と同様（「参考になった」などの単純な感想は除く）で行った。分類ごとの記載の割合は図-9 のとおりである。

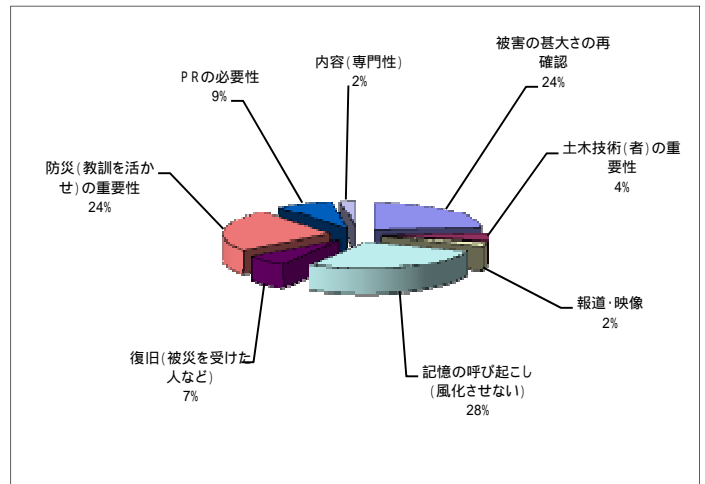


図-9 分類別記載の割合

分類ごとの主な記述内容は以下のとおりである。

[被害の甚大さの再確認]

- ・あらためて被害の大きさを知った。
- ・阪神大震災並みの大災害だったことを改めて思い出した。
- ・伊勢湾台風は東京で経験したが、名古屋がこんなにひどいとは知らなかった。 等

[土木技術 (者) の重要性]

- ・土木技術の役割の重要性を再確認した。 等

[報道・映像]

- ・実録映像が多く、非常に強く印象に残った。 等

[記憶の呼び起こし (風化させない)]

- ・災害を忘れないようにしないといけない。
- ・貴重な経験を風化させることなく、多くの人にみてもらいたい。
- ・三重県四日市市に住んでいて (1967 ~ 1977) , 伊勢湾台風のことは何度も聞いた。 等

[復旧 (被災を受けた人など)]

- ・被災された本人の生の声を映像で見れてよかった。 等

[防災 (教訓を活かせ) の重要性]

- ・災害の教訓をいかしたい。
- ・防災対策の投資をもっとやるべき。 等

[P R の必要性]

- ・すごい映画。もっともっと公開すべき。 等

[内容 (専門性)]

- ・技術的な話がない。 等

4.3 アンケート結果のまとめ

「阪神大震災による道路の被災と復旧」と「伊勢湾台風から30年」の2作品のアンケート結果から次のような結果がわかった。災害の種類は違うが、見終わった感想には共通点が多いようである。それは分類した項目のとおりであるが、特に「被災の大きさ」、「記憶がよみがえった」、「被災を風化させてはいけない」などの記述が顕著である。とても真摯的な意見で貴重である。しかし、属性からわかるように高年齢層であり土木系の出身者が多く、また上映会も都会の交通の便のよいところに在住している人たちであるのもわかった。

5. まとめおよび今後の課題

アンケート結果から、災害映像を上映し、視聴することによって災害の凄さや風化させてはいけないなどの認識を持ってもらえることがわかった。

しかし、属性からわかるように高年齢層であり土木系の出身者が多く、また上映会も都会の交通の便のよいところに在住している人たちであるのも事実である。映像委員会では引き続き選定映像の災害記録映画を上映し、災害の怖さ、風化させない努力を推進する予定である。実際、最近では、一般市民の方々は増えつつある。しかし、今回の属性にない若年層、都会でない地域の一般市民の方々にどう活用してもらうかが今後の課題になる。

災害記録映像の所在と著作権問題

災害記録映像は、土木学会だけでなくNHK特集の番組映像、官公庁、企業で埋もれている映像も数多くあると思われる。これらを上映しないのは、宝の持ち腐れになる。埋もれている災害記録映像を発掘し、1つでも多

く上映することが災害の記憶を風化させないひとつの解決策でもある。平成16年1月に著作権法改正法⁵⁾により学習者による複製、遠隔地での授業への公衆送信等が承諾を得ずに行えるようになった。しかし、著作権の問題はナイーブな部分も含まれるので注意する必要がある。

小・中学校の授業で活用する

小・中学校の総合学習の時間等を有効利用して、その地域で起こった災害などを学習、その一環として災害映像を活用してもらい教室や体育館などで一般の人々も含めて視聴してもらう。その場合、実際に被災した人の話しや専門家である土木技術者も参加すると有効であると思われる。また、小・中学校を使用することにより地域の避難場所の確認、地域住民との交流にも役立つと思われる。

今後これらの課題を解決し、映像をより有効に活用するためには、土木学会、国・地方公共団体、教育機関などの連携が重要になると思われる。

参考文献

- 1) 土木学会土木技術映像委員会 HP :<http://mme.kitera.ne.jp>
- 2) 萩原幸男：災害の事典，朝倉書店，pp356-364，1992.11.
- 3) 土木学会土木技術映像委員会 HP 映像 DB：
<http://www.mme.kitera.ne.jp/data/AVDATA/170082.html>
- 4) 土木学会土木技術映像委員会 HP 映像 DB：
<http://www.mme.kitera.ne.jp/data/AVDATA/k01770.html>
- 5) 著作権法第35条ガイドライン協会：学校その他教育機関における著作物の複製に関する著作権法第35条ガイドライン，2004年3月

(2010年8月6日受付)